

主 題：再臨への備え

聖書箇所：ヘブル人への手紙 10章19-25節

ヘブル人への手紙10章の19節から25節までみことばを見ていきます。このヘブル人への手紙の著者は救いに与っている兄弟たちに対して、「私たちは主イエス・キリストのいけにえによって救いに与った」ということを教え続けています。私たちの行ないによって救いに与るのではなく、主イエス・キリストが為してくださったあの贖いのみわざによって、それを信じる一人ひとりが救いに与るということを著者は繰り返し読者たちに教えるのです。19-20節「:19 こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所に入ることができるのです。:20 イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。」と、救いのことを記しています。しかも、「全き信仰をもって」私たちはこのすばらしい救いに与ったということを、この著者は教え続けています。主イエス・キリストの救いに与った一人ひとり、つまり、救われた者は神からこのような祝福をいただいています。

*「全き信仰をもって」、救いに与ったことによって得た二つの祝福・特権

(1) 聖所にはいることができる 19節

(2) 罪の汚れから聖められた 22節

著者は私たちはこの救いに与った、しかも、その救いに与るというのは、神の為されたすばらしい完全な贖いのみわざを信じる信仰によってと言うのです。ですから、22節に「全き信仰をもって」ということばが記されています。それ以外の方法はない、どんなに私たちが心を入れ替えて正しい人間となって正しい行ないをしても、私たちの行ないが私たちを救うのではなく「信仰による」ということを、著者は改めて私たちに教えてくれています。

(1) 聖所にはいることができる : つまり、この救いに与った者たちはいつでも神の前に立つことが出来るということです。かつてのように、大祭司を介して神の前に立つのではなく、今、私たちは神の前にいつでも立つことができるのです。この「聖所にはいることが出来る」というのは、あの幕屋、神殿の中で最も聖い神との会見の場所、大祭司が年に1回しか入ることが出来なかったその場所に、私たちはいつでも立てると言うことです。ヘブル4:16には「ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」とあります。この「恵みの御座」も今話していることです。大祭司が年に一度主と会見できたその場所に、最も聖い場所にあなたも私も立つことが赦されている、それは救いによってこの祝福をいただいたからと言うのです。私たち信仰者が覚えなければいけないことは、いつも聖い神の前に立つことが赦されているということです。それが救われた者たちに与えられた神からの祝福の一つです。

(2) 罪の汚れから聖められた : 22節「そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪惡な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。」、ここに記されていることは罪からの赦し、罪からの救いのことです。この「きよめられた」、「洗われた」という二つの動詞はすべて完了形です。つまり、イエス・キリストを信じたあなたは、救いに与ったあなたはもうすでにこのようなことを経験している。もう、あなたはきよめられた、すでに洗われたと言うのです。「心に血の注ぎを受けて…からだをきよい水で洗われた」と、救いに与ったということを著者は教えます。

19節と22節に「血」ということばが2度記されています。

・19節「イエスの血によって」 : ヘブル9:12ではこのように教えています。「また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられたのです。」と。これまで私たちが見て来たように、動物の血によっては完全な永遠の救いを得ることが出来なかった。一時的な赦しを得ても永遠の赦しを得ることはなかった。しかし、イエス・キリストのいけにえによって、信じるすべての人が完全に永遠に赦されるということです。我々は真の聖所に、聖い神の前に立つことが赦されているのです。

・22節「血の注ぎを受けて」 : 「からだをきよい水で洗われた」というのは水のバプテスマのことではありません。「きよめ」のことです。旧約聖書エゼキエル書36:25に「わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよめられる。」と書かれています。ですから、「きよめ」のことを言っているのです。

このヘブル書の著者は私たちに教えてくれます。全き信仰によって、あなたがイエス・キリストを信

じることによって、あなたのすべての罪が永遠に完全に赦される、あのイエス・キリストの十字架と復活はそれだけの力があるということです。どんな罪人でもその罪を赦していただける、どんな罪人でも新しいスタートがある、どんな罪人でも赦しの希望があるということです。そのことを著者は教えるのです。

さて、この救いをいただいた信仰者一人ひとり、あなたのことです。そのあなたに対して三つの勧めがされています。実は、著者は「叙想法」という形を使って、著者が思っている思い、達成したいと願っている思い、それをいっしょに達成しようと呼びかけるのです。著者が持っている願望、願いを読者たちと共有して、いっしょにこれらのことを成し遂げようと呼びかけていきます。

◎救いの祝福をいただいた者への三つの勧め、三つの叙想法

(1) 全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか 22節

著者自身もそうだが、いっしょに真心から神に近づこうではありませんかと、このように呼びかけるのです。

(2) 動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか 23節

(3) 互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか 24節

こうして、この三つの箇所では著者自身が望んでいることを、読者たちすべても同じように生きようにと願っているということが分かります。

イエス・キリストの救いを覚える一人ひとは、次のように生きていきなさい、救いのすばらしさが分かった皆さん、そのことを感謝しているあなたがたは次のように生きていきなさいと著者は教えます。レオン・モーリスという神学者はこう言います。「キリストのみわざへの熟考は、彼の民を行動へと駆り立てる。」と。そう思いませんか？皆さん。主イエス・キリストが私のために何をしてくださったのか？あの尊い十字架とその復活を見るときに、そして、そのことを心から感謝するとき、私たちが考えることは、では、私はこの神のために何をしようか？です。実は、そのことがここに記されているのです。

今から私たちは、救われた者として実践すべき三つの生き方を見ていきます。別の言い方をすれば、主イエス・キリストに対する信仰者であるあなたが持っている三つの責任のことです。

◎救われた者として実践すべき三つの生き方

A. 正しい心をもって生きる 22節

22節「そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。」「神に近づく」とは、一人ひとり救われた者たちの神への態度を教えています。一人ひとりが真心をもって神の前に立つことが必要だと言うのです。

1. 真心の意味

この「真心」とは、「真実な」という形容詞と「心」という名詞から成ることばです。「真実な心」です。「真実な」とは「純粹、誠実、正直な」という意味です。このことばを否定的に見るなら「偽善的でない、表面的・見せかけではない、正しくない動機からではない」という意味になります。「真心からしなさい」と、つまり、「真実な心」です。「心」という名詞が続いているのは、「心」が信仰者にとっても、すべての人にとっても大切だからです。「心」とは私たちの「意志、感情、行動」をコントロール、制御するところです。

まず初めに記されている勧めとは「正しい心をもって生きていこう」と教えるのですが、彼が言わんとすることは、正しい心をもっていつも歩んで行きなさい、あなたが信仰者として主に対して為すすべてのことにおいて、その動機が心が正しくなければならないということです。つまり、信仰者である私たちはすべてのことを神のためにしているはずで、これは私のため、これは神のため、これはだれかのためなどとするものではありません。私たちはすべてのことを神のためにするわけです。もっと分かり易く説明するなら、私たちひとり一人は罪の奴隷であって、奴隷市場の中にいた者であって、ある人がやって来て代価を払ってあなたを買い取ってくださった。つまり、私たちは、私たちを買い取ってくださったその主人の奴隷だということです。なぜ、私が奴隷なのか？と思うかもしれませんが、でも、人間は実はみな奴隷なのです。罪の奴隷か神の奴隷かです。生まれながらの人間はみな罪の奴隷だから、私たちは罪から離れることが出来ないのです。罪という主人に対して我々は服従するしかないのです。しかし、私たちは救いに与ることによって、罪の奴隷から解放されて神の奴隷となったのです。ですから、私たちの考えることは、この神をどのようにして喜ばせようかであって、そのためにすべてのことをするのです。奴隷とはそうでしょうか？もちろん、私たちは奴隷を直接見たことはありません。でも、いろいろなことを通して、奴隷とはこのように生きた人だと知っています。彼らの一番の望みは「主人を喜

ばせること」です。私たちはそのような人へと生まれ変わったということです。かつては、神を喜ばせることのなかった私たち、神が憎まれることを平気で行ない続けて来た私たちが、この救いによって神が喜ばれることを為す人へと生まれ変わったのです。これが救いなのです。

ですから、この著者が教えることは、すべてのことをあなたは主のために為している、でも、あなたが考えなければいけないことは「あなたの心」だということです。どんな心を持ってやっているか？です。例えば、皆さんが奉仕をしている、問題は何をするかではなくてどんな心をもってその奉仕をしているかです。喜びをもってその奉仕をしているのかどうかです。だれを見て奉仕をしているのかです。これまでの私たちは、人に認めてもらいたい、人に是非見てもらってその人たちからの評価を得たい、称賛を得たいと思っていたかもしれません。しかし、生まれ変わった私たちは、人の評価はどうでも良いのです。神の評価を求めて生きるのです。なぜなら、いずれ私たちはみな例外なく、罪の奴隷であろうと神の奴隷であろうとみな神の前に立ちます。罪の奴隷であった者たちはその罪が神の前でさばかれます。その結果、永遠のさばき、永遠の地獄です。しかし、この救いに与った者たちも同じように神の前に立ちそこで神があなたをさばかれるのです。それはあなたの罪をさばくのではなく、あなたの信仰者としての歩みをそこで評価してくださるのです。主の教えにどのように忠実に従って来たのか？それが明らかにされるところです。だから、私たちはその時のことを覚えて生きるなら、まず、注意すべきことは「私の心が正しいかどうか」です。どんな思いをもってこの働きをしているかです。何をするかよりも、どんな心をもってやっているかが大切なのです。

教会で掃除をしている、食事を作っている、人の目の届かないところでいろんな奉仕をされているでしょう。大変感謝なことです。主はそれをちゃんと見ておられます。そして、あなたの動機が正しければ、あなたの心が正しければ、神はそれにふさわしい報いを与えてくださいます。でも、ある人たちは人の目を意識して人からの評価しか求めていない。そのことしか考えていない。もしかすると、教会の中では霊的な存在として人の目には映っているかもしれない。いろんな大切な働きをして霊的な存在と思えるかもしれない、リーダーと呼ばれているかもしれない。でも問題はその人の心です。だれのためにやっているのか？です。最初にこの著者が教えることは、もちろん、一時的にはこの読者たちですが、あなたの心が正しいかどうか、それをいつも吟味しなさいということです。

「心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからです。」（マタイ 5：8）と主イエス・キリストは言われました。「心がきよい者」、今、私たちが見ていることと同じです。心の中に混ざり物がない、混合物のない、動機が常に神の前に純粋である人、そういう人は幸いです、神がそういう人を喜ばれるということです。信仰の勇者たちはみなそのことに気付いていました。自分の心が大切だということを。

あのダビデも自分の罪が明らかにされた時このような告白をしています。詩篇 51：6、10 「6 ああ、あなたは心のうちの真実を喜ばれます。それゆえ、私の心の奥に知恵を教えてください。」 「10 神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。」、あなたが仕える神はどんな神か？と考えてみてください。この方は人間が造ったものではありません。人間を造られた方です。人間の手のわざによって作ったものではありません。その像を作った人間をお造りになった方です。この方はすべてにおいて完全に聖い正しいお方です。その方の前に立つ、それを考えるだけでそこには聖さが要求されることは説明するまでもありません。しかも、この神はあなたの心のすべてのことを見ておられます。

「15 あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なるものとされなさい。16 それは、「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない」と書いてあるからです。」（1 ペテロ 1：15、16）、あなたも私もすべてにおいて聖い神の前を生きるのです。この方はあなたのすべてのことをご覧になっています。もちろん、そこには私たちの希望があります。神は私たちのことを正しく見ておられるからです。例えば、人が正しく皆さんを評価してくれなくても、神が評価してくださる。ですから、人がどう言おうと、私たちは神に従い続けて行こうとするわけです。

この私たちのすべてをご覧になっている神が聖い方であるゆえに、この方の前に私たちが立つのであれば、私たち自身も聖くならなければいけません。行動だけではなく私たちの心がです。

なぜ、先ほどから「心、心」と言っているのか？皆さんお分かりでしょう。心が聖く、心が正しくあることの大切さは、その心から行動が生まれて来るからです。聖い正しい心からは良い行ないが生まれます。主がお喜びなる心からは、主がお喜びになる行ないが生まれて来るのです。だから、私たちは自分の心を聖く保つことが必要だと、まず著者はそのことを教えます。

B. 主への信頼をもって生きる 23 節

23 節「約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。」、

1. 希望を告白すること 23 節

私たち信仰者がもっているその希望を公にするようにと、そのように勧めているのです。

1) **希望とは** : 「希望を公にしないで」と。「希望」とはいったいどういうものでしょう？広辞苑ではこのような定義がされています。「あることを成就させようと願い望むことである。将来に良いことを期待する気持ちである。」と。この世界でいう「希望」の主語は「自分自身」であることは明らかです。自分が望んでいること、自分が期待していること、それが叶いますようにと、まさに夢のようなものです。しかし、私たちクリスチャンの希望はそのようなものではありません。私たちが抱く願いや望み、期待を成就しようとするために努力すること、そうではありません。著者はそのようなことを教えていません。では、クリスチャンの希望とは何でしょう。それは「主への信頼」のことです。主の約束は必ず成就する、必ず実現するという強い確信こそが私たち信仰者の希望であると、みことばはそのように教えるのです。この世の多くの人たちがもっている希望は、必ずしも実現するとは断言できません。そのことは私たちもいろんなところで経験して来ました。希望をもっていた、夢をもっていた、でも、そのすべてが成就したかという、そうでないものがたくさんあります。

2) **動揺しないで** : しかし、クリスチャンのもっている希望は必ず実現するのです。なぜなら、私たちの希望というのは全能なる神の約束だからです。この手紙の著者は「主の約束への信頼をあなたは失ってはいけない、それを保ち続けるように」と勧めています。だから「動揺しないで」ということばが記されています。なぜ、このような注意を促しているのか？信仰者の周りにも信仰をぐらつかせること、動揺させることが溢れているからです。

言い方を変えると、信仰者から希望を奪っていく、主への信頼をぐらつかせるものが周りにたくさん存在しているということです。また、そのような事柄に私たちは度々遭遇しています。世の人々はいろんな不安を抱えています。NHKの統計で「関東甲信越に暮らす18歳から34歳までの人たち、2千人を対象にしたアンケート」ですが、どのようなことに不安を抱いているか？一番多いのは「生活費や収入に対する不安」、次いで「仕事や勉強に対する不安」、「家族の生活や健康に関する不安」、「就職や進学について」、「自分の健康について、結婚、生きがい、孤立について」、そして、一番少なかったのが「友人、職場などの人間関係について」です。どこかに該当するかもしれません。若いから不安や悩みがないわけではない、あるのです。皆さんもその中を通しておられるかもしれません。

不安を抱えているのは若い人たちだけではありません。一般財団法人の経済広報センターというところが2012年、高齢社会に関する意識調査を行ないました。60代70代の人たちがどのようなことを不安に思っているのか？1位は「健康で自立した生活を送ることが出来なくなるのではないか」、2番目は「配偶者との離別」です。次に「家族が健康を損ねてしまう、また、その世話が出来なくなってしまう」、4番目は「年収（年金等）が減少し生活が苦しくなる」、5番目は「体調を壊したときに十分な医療、介護が受けられなくなるのではないか」、6番目は「家族や知人などと疎遠になり孤立することの不安」です。つまり、どの年齢でも人間は不安を抱えているということです。もしかすると、皆さんも不安を抱えていらっしゃるかもしれません。

この著者が言うことは「動揺してはいけない」です。確かに、私たちはいろんな現実を突きつけられます。肉体の衰えもあるでしょう。突然の病いが来るかもしれない。職を失うことがあるかもしれない。いろんなことが私たちの周りに起こります。つまり、私たちから希望を奪っていくもの、そのようなものが私たちの周りに溢れています。そこでこの著者は「動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではないか。私もそうするけれど、あなたたちも、救われた者たちは同じように歩もうではないか。」と言います。

どうすればいいのか？皆さん、お分かりでしょう？確かに、私たちの周りにはいろんなことが起こっていくわけですが、大切なことは「決して変わることはない、決して揺らぐことのない神の約束を見てそこに立つこと」です。そこに立つことができるのは私たち信仰者です。私たちの希望というのは、淡い希望ではありません。期待、夢ではありません。私たちの希望とは「神がこう言われた。私はそれを信じる。」です。あなたに与えられた救いは決して失われることはありません。あなたがもし神によって救いに与ったのなら、その救いは絶対に失われることはないのです。これはあなたが勝手に思っているのではなく「神の約束」です。神は常にあなたを守り、常にあなたとともにいてくださる。「わたしは決してあなたを離れず、あなたを捨てない。」、これが神の約束です。これが私たちの希望なのです。ですから、一人ぼっちだ、寂しいと孤独を感じるときでも、私たちはその希望をその約束を覚えるときに「そうか！神がともにいてくれるのだ！」と、それが私たちの心に希望の光を灯すのです。「神はあなたの必要を満たしてくくださる」と、すると、いろんな必要を抱えるときに、神の約束に立つなら私たちはその中で、では、神はどのようにしてその必要を満たしてくくださるのか期待しようと希望が湧いて来ます。

この救いをいただいていない人たちは、神という土台に立つことが出来ないのです。でも、この救いに与った私たちは神という揺るがない土台に立つて生きることが出来る、これが希望だと言うのです。だから、いろんなことが周りに起こっていくし、この年もいろんなことが起こるかもしれない。でも、私たちが目を向けるところは周りに起こる現象、出来事ではなくて、その背後におられる完全な神です。これが私たちの希望なのです。

もう一つ、信仰者の皆さん、あなたが直面しているいろんな課題、問題、それらはすべて主の偉大さ、真実さを学ぶ機会であるということを忘れてはいけません。主はいろんな機会を与えてくださる、それは、神がどんなに素晴らしいお方であるかということをおあなた自身に教えるための機会です。そのことを通して私たちは、この神がいかに素晴らしいお方であるか、そのすばらしさを学んでいくのです。ですから、私たちが心配しなければいけないのは、神の約束が成就するかどうかではなくて、私自身がこの神の約束を信じて信頼を置いて歩んでいるかどうかです。神が言われたことは必ずその通りになります。神だから！全能のお方だからそうなるのです。私たちが心配すべきことは、私は神の前を正しく歩んでいるかどうかです。どんなときにでも神への信頼を堅くもって生きているかどうかです。

F F ブルースという神学者は「希望は神の間違った約束に基づくものである。とすれば、その希望を堅く心に抱き勇敢に告白するのは当然ではないだろうか。」と言っています。今、見て来たように、私たちクリスチャンの希望というのは、私たちがどう思うか？どう感じるか？という、そのような土台のないものではない。神の間違った約束に立っているのです。あなたを愛しておられる全能の神の約束の上にしっかりと立つのです。ですから、神の揺るがない約束をしっかりと心に抱いて「私はこんな希望をもっています。私の主はこんな神だ。」と告白する、それは当然のことではないかと言うのです。皆さんはどのように歩んでおられますか？救われた者たちはこのように生きなさいと著者は教えてくれるのです。

C. 徳を高める者として生きる 24、25節

「:24 また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。:25 ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」、

1. 兄弟たちの霊的成長、信仰の成長を目指す

1) 注意し合おう

「注意」とは「励まし、激励、刺激」という意味を持ったことばです。また「…し合おう」と書かれてあることは「励ましや激励、刺激をお互いに行なうこと」を教えています。だれかがこういう働きをしなさいとか、だれかだけがすれば良いということではなくて、すべての救われた者たちにこれを行なうようにと教えているのです。整理します。この24節で著者が私たちに教えようとしたことは、お互いに注意し合いなさい。それは「信仰者が愛と善行において成長するため」だということです。神への愛、隣人への愛が成長するように、また、主に喜ばれることを継続して行ない続けていくように、その良い行ないにおいて成長するように、そのように励まし合うように、その責任がある。お互いにそのように歩んでいくように刺激し合っていきなさい、励まし合っていきなさいと、そのことがこの箇所では教えられているのです。

当然、私たちは一人ひとり、主にあってその信仰が成長するように、主の前を正しく歩み続けて行こうとします。しかし、みことばが教えていることは、それだけでは不十分だ、あなたの周りの兄弟たちが信仰において成長するように彼らを励ましていきなさいということです。信仰者にはお互いの信仰の成長のために責任があるということを忘れてはならないということです。「私だけ成長していればそれでいい。他の人がどう歩もうと勝手だ。」ではなくて、私たちはお互いに励まし合いながら、お互いに成長していこうとする、そのことが24節で教えられています。

2) 互いに勧め合う

「勧め合う」とは「何かについて注意深く考える」という意味です。この箇所の日本語訳をされた先生方は大変ご苦労されたと思います。非常に難しい箇所です。この「勧める」は一人称の複数が使われています。つまり、「私たち」ということです。この兄弟たちの信仰の成長の責任は私にもある、あなたにもあるということです。信仰者全体がそれぞれの成長のために励まし合っていくということです。

☆クリスチャンとは、神のために、そして、兄弟のために仕える者である

24節、著者はこう言います。「兄弟たちが愛と善行において成長するために、何をすべきかを各信仰者が考えるように」と、それが著者の勧めなのです。つまり、この著者は読者に対して、そして、私たちに対して「あなたの周りにいる兄弟姉妹たちがその信仰において成長するために、彼らの愛が成長するために、彼らの善行が成長するために、何をすればいいのか？そのことをしっかり考えて、それ

を行なっていきなさい。」とこれが24節の勧めです。しかも、これは現在形の動詞です。継続してそれを行なっていきなさいと言います。

私たちはこうしてともに集まっています。ここに集う私たち一人ひとりの責任というのは、周りの信仰者の信仰が成長するように、彼らの愛が善行がそれにおいて成長していくように、その務めが神によって私たちに与えられているということを、この箇所が私たちに教えているのです。

こうして見て来ましたが、ここではクリスチャン生活の大切なところを教えてください。信仰者の歩み中に「自分」というのはありません。気付かれましたか？それまでは私たちは自分がすべての中心でした。私が何をしたいか、私は何を欲しがっているのか、私は何を望んでいるのか、私のために何をしてくれるのか？と、常に中心にいたのは私たち自身です。ところが、信仰に至った私たちは、まず神のことを優先し、そして、周りの人々を優先するのです。自分のことよりも、その人たちの信仰の成長のために何が出来るのだろうか？と。自分のために生きて来た私たちが、人のために生きる者へと変わるのです。自分を神とし、その自分のために生きてきた私たちが、真の神のために生きる者へと生まれ変わり、その方のために生きるのです。

絶対に忘れてはならないのです、皆さん！あなたの関心が自分に向いている限り、あなたの信仰は成長しないし、あなたは本当の主の祝福を経験することはありません。あなたの関心があなたに向いているなら、あなたは自分が被害者であるというつも思うでしょう。ですから、あなたにとって大切なことは、あなたのことよりもあなたの周りの人たちのことを考えて、彼らのために生きることがこの箇所でお教えられています。そして、そのための動機が次に出て来ます。

2. 実践の動機 25節

ここで著者が動機として挙げていることがあります。それは「迫り来る主の再臨」です。主イエス・キリストが戻って来られるという事実を挙げて、それを動機として歩むようにと勧めるのです。

1) 集まりに加わることへの奨励

集まりに加わりなさいと奨励しています。「ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、」と書かれてあるのは、そのような人たちが存在していたからです。先ほどのFFブルースは「初代教会の末期、ある地域ではキリスト者の交わりから退こうとする傾向があったようである。」と言っています。歴史的に見てそのようなことがあったのでしょう。ともに集まらなくても自分一人だけで頑張っている。そこでこの著者は私たちに言うのです。集うことの大切さ、それを忘れてはならないと。

☆「ともに集まる」ことは、キリスト者が礼拝をささげ、お互いの励ましのためである

「集まってともに励まし合っていきなさい」ということは、私たちがこうしていっしょに集まるということは、もちろん、礼拝をささげるのですが、同時に、お互いの励ましのために集まるのです。私たちの信仰の歩みが正しく、そして、主に忠実に従って歩んでいくために、私たちは励まし合っていくことが必要だと、そのことを著者は私たちに教えるのです。

2) 切迫した主の再臨

著者はこう言います。「かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」と。この「見る」とは視覚で見るというよりも「知覚する、気付く」という意味です。これはクリスチャンでなくても気付いていますね。今、私たちが住んでいる時代がどのような時代なのか？多くの人たちが言うのは、彼らが認めるか認めないかはともかくとして、世の中が悪い方向に向かっていることを知っているし、ある人たちは「世の終わり」ということばを使って表現しています。彼らにも分かるのです。私たちクリスチャンはもっとそのことに気付かなければいけないのです。

今、私たちはこうして聖書を学んでいます。この学びを通して、私たちは今がどんな時代なのか、今どんな時代に自分たちが生きているのか、そのことをしっかりと覚えなければいけないのです。主にお会いする日が近いのです。ということは、主のために働ける時間が、その機会が一日一日と少なくなっているということです。そのように考えたことがありますか？確かに、主にお会い日が近づいている、当然、私たちはその日を待っているのですが、同時に、この地上にいて主に仕えることの出来る機会が一日一日少なくなっているということです。だから、私たちはその主にお会いするための備えをもって今日生きることが必要なのです。

あのパウロが最後に記したと言われているのが「テモテへの手紙第2」です。彼は非常に感動的なメッセージを最後に記しています。4:6に「私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来しました。」と書いています。これを読むと、パウロの死期が近いということ、そのことにパウロ自身が気づいていたことが分かります。大切なのはその後です。4:7「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。」と、このような告白をすることが出来る信仰者って何人位いるでしょう？神の前に悔い改めること、その必要を覚えている信仰者は山ほどいるでしょう。もちろん、パウロ

だってその中の一人だったでしょう。でも、パウロは最後に信仰者としての自分の人生を振り返って「私はやるべきことをやって来た。私はいつでも主の前に立つことができる。私は主が命じて来られたことを精一杯やって来た。」と言うのです。このように言いたいと思いませんか？皆さん！「私は走るべき道のりを走り終えた。主が私に命じられたことを私は守って来た。私はいつでも主の前に立つことができる。」と。もしかすると、多くの信仰者は「神さま、私は今あなたの前に立つことが出来ません。私の過去の信仰の歩みを見た時に本当に不忠実でした。あなたの前に立つことが出来ません。」と言うかもしれません。きっと多くの方がそのように感じているでしょう。

皆さんへのチャレンジです。過去を嘆くことはいっぱい出来ます。でも、それはどうにもならないことです。あなたが自分に問いかけなければならない質問は「今日から私はどのように生きるか」です。「この日から私はどのように生きていくか？」と、それがあなたが自分に問わなければいけない質問です。パウロはこう言います。4：8「**今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。**」、彼が言っているのは「私が主の前に立つときにわたしの義は完成する」です。イエス・キリストを信じたときに義と認められました。信仰生活を通して私たちは義なる者へと日々変えられていきます。最終的に、私たちはすべての点において義なる者へと、つまり、「栄光のからだ」をいただくということです。そのとき罪から完全に解放されるということです。

そのことをパウロはここで話します。その完全な義が、これはイエスを信じたときに与えられた義が不完全だと言っているのではありません。義と認められたのです。しかし、認められた私たち、救いに与った私たちは、この罪から解放されて栄光のからだをいただくその日を待っています。そのことを言っているのです。彼は完全な義をいただく、神の前で完全なものとされるということです。そして、その上でこう続きます。「**私だけでなく、主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。**」。パウロが教えることは、自分もそのように生きて来たけれども、もし、あなたたちも同じように生きるのなら、あなたたちも素晴らしい祝福に与るということです。なぜ、パウロはここで「**主の現れを慕っている者**」と言ったのでしょうか？なぜ、このような言い方をしたのでしょう？それは、これがパウロ自身の動機であり、そして、彼がすべての信仰者に求める動機だからです。それがここに記されているのです。私たちがクリスチャンとして主に従って行くために持ち続けるべき動機とは「主にお会いする」ということです。この素晴らしい主に私はお会いする、人々はそれを動機にして忠実に歩み続けたのです。それをパウロはすべての信仰者に求めるのです。

「徳を高め合っていきなさい」と、この新しい年を迎えて私たちの群れにあって期待することは、あなたの信仰の成長のためにだれかが私を助けてくれるのではなくて、あなた自身がだれかの信仰の成長のために何が出来るかを考えていくことです。だれかが私のために何をしてくれるのか？ではなくて、あなたが人々のために何をするかです。そして、今日見て来た勧めを思い出してください。心がいつも正しくありなさい。あなたの心が、心のその動機がいつも神の前に正しくあるように。どんな時でも主への信頼を失わないように。そして、徳を高め合う者として生きていきなさい。兄弟たちの信仰が成長する、そのために生きる者として歩んで行きなさいと。これらの歩みの動機となっていることは何か？「私は主にお会いするのだ。その日が近づいているのだ。」と、そのことを思いながら、今日を生きていきなさいと言うのです。

これまで、あなたは信仰者としてあなたを救ってくださった神の前に、主が本当に喜ばれる歩みをして来られたのでしょうか？主への心からの感謝を表わす、そんな歩みをして来られたのでしょうか？それとも、何となく自分のために時間を費やして来た、そんなことはなかったのでしょうか？時は短くなっています。主にお会いする前にあなたにはすることがあります。このみことばの実践です。どうぞ、そのように歩んで、そして、素晴らしい救いをいただいた者として、その主を証し続けてください。それが私たち信仰者に与えられた大きな責任であり、大きな特権です。

《考えましょう》

1. どうして正しい心を持つことが大切なのでしょう。
2. 正しい心を持ち続けるためにはどうすれば良いのかを記してください。
3. 自分のことをまず考える生き方が、信仰の成長の妨げとなる理由を記してください。
4. 主の再臨を覚えて生きることが、大切な理由を挙げてください。
5. あなたは今日主から何を教えられましたか？あなたはそれをどのように生活に生かされますか？信仰の友と分かち合い、互いがみことばを実践できるように祈り合ってください。